

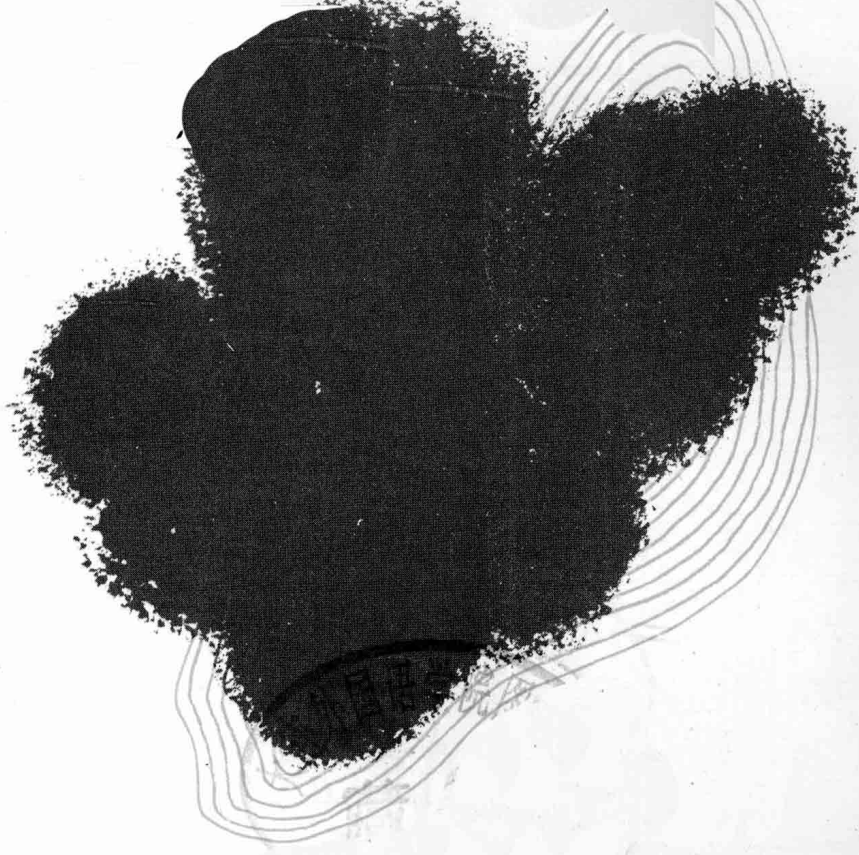
不良少年物語



佐藤忠男

ちくま少年図書館17
社会の本





不良少年物語

佐藤忠男

ちくま少年図書館 17

371. 3/不良少年物語

著者略歴

1930年新潟県に生まれる。小学校を卒業後中学受験に失敗して海軍に入隊、3か月で敗戦となる。49年、鉄道教習所を卒業して国鉄、電電公社などに勤めるかたわら『キネマ旬報』『映画評論』に投稿。1957年上京して『映画評論』『思想の科学』の編集者となる。現在は映画、教育、大衆文化等の幅広い分野でユニークな評論活動を行なっている。主な著書に『日本の映画』『裸の日本人』『斬られ方の美学』『日本映画思想史』『権利としての教育』などがある。

筑摩書房/1972年初版

244pp/18.8cm/四六判



1972年4月25日 第1刷発行

1972年7月25日 第2刷発行

著者◎佐藤忠男
発行者井上達三
発行所株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

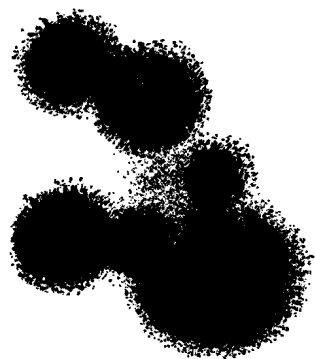
電話 東京 (291) 7651 (代表)

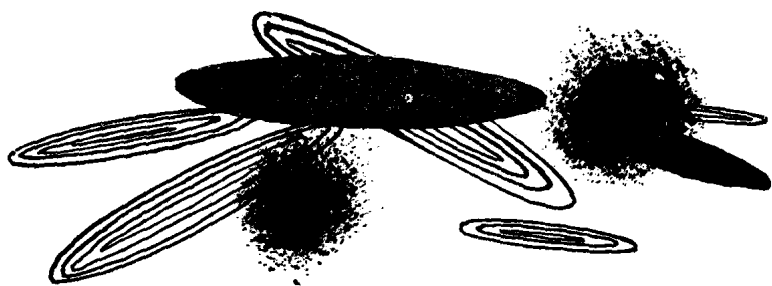
郵便番号101-91/振替・東京4123

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8037 (製品) 04017 (出版社) 4604

不良少年物語





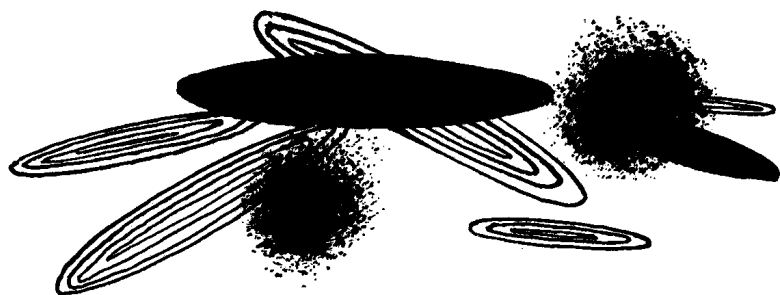
もくじ

1 子どもはつらいよ

なぜ不良になるのか 子どもをおびえさせるおとなたち
 許せないただ一人のおとな 死んでみせてやる 感情的
 な反発は損 いったいなにが悪いことなのか 悪いやつ
 に目をつけられるな 子どもだってつらいんだ おとな
 になんか負けるな

2 反逆児 大杉栄

虐殺された無政府主義者 悪たれ小僧の学校生活 しよ
 つちゆうなぐる母親 けんかであけくれる毎日 母親に
 自分のことがわかってもらえない悲しさ ひきょうなこと
 だけはしない誇り 幼年学校の不良仲間 きらいな人間
 の命令なんか聞けない 軍隊はどうしてもいやだ 退学



3

少年院出身の芸術家 ルイ・アーム ストロング

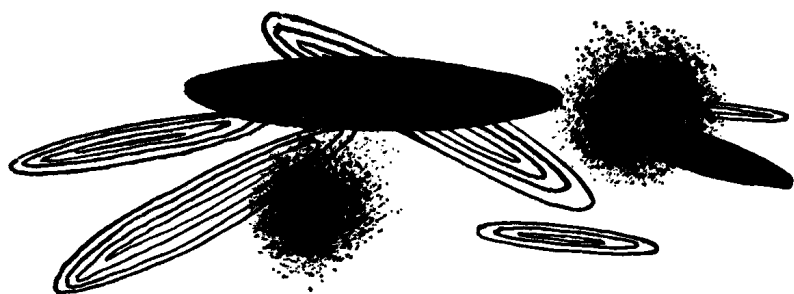
処分 これからがほんとうの人生だ 自分は何に反抗するの
か あばれることのほんとうの意味

人種偏見と貧民街 少年院へ 日本にだってある人種差別
あこがれのラッパ手 ほんとうの不良になってやろう
かという思い おとなのわなに、はまるな ベトナム
戦争に学べ 安酒場でのコルネット吹き 一人前のジャズ・プレーヤーに

4

坂口安吾のせつない少年時代

兄弟の中で自分だけがかわいがられない不安 ひどい親を
もったはどうするか 自分だけしかる母親 こんな不良
にだれがした いじっぱり少年の気持 劣等生のせつ
なさ 消えた反抗心 自分は正しい人間なのだ 自分
はだめな人間だときめつけるな



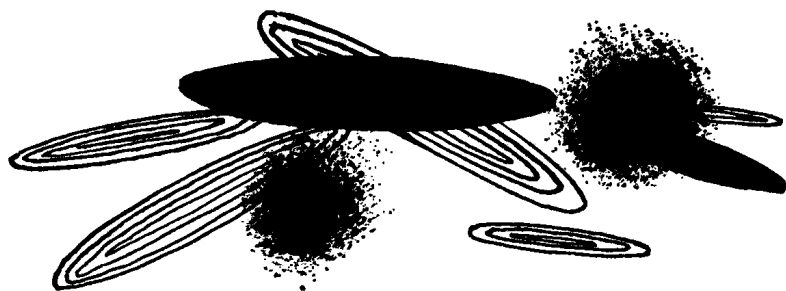
5 学校を追われた大宅壮一^{おおや そういち}

なぜ退学させられたのか 優等生になろうとは思わない
きらいな学科までなぜ勉強するのか 学校は一日おきに登
校すればよい 飯粒^{めいご}と小石 教師たちを見返してやる
つらぬいた男の意地^{いじ} 生徒の疑問に教師は答えてきたか
言いたいことをはつきり言うむずかしさ

6 若者たちはイバラの道を行く

広域重要事件一〇八号 それまでの経歴 かかえつづけ
た一冊の本 勉強したい なぜ凶悪犯人になつてしまつ
たのか 貧乏^{びんぼう}が人間を変えてしまう 世の中から見放さ
れる不安 おとなしい頭の良い少年の犯行 身にしてみた
人種差別 どうしてももてなかったあたたかい気持

7 自分の世界をもとう



8

敗北か、前進か

学校時代はいやなことばかりあった 先生だって許してや
ろう 自分の力でもしろいことを発見してゆこう 親
はなぜ勉強しろと言うのか 人間の価値は学校の成績では
ない アメリカの反省とヒッピーの登場 おとなに何が
わかるんだ

不幸なのは自分だけという思い 屈辱くつじよくの時代 進学する
者は少なかった みじめな思いへの復讐ふくしやう 将来への絶望
感 子どもが時代の先端せんたんをゆくとき 子どもどうしの競
争の激化 子どもの苦勞はますますふえる 自分のほん
とうの道を見失うな

おわりに

さし絵 朝倉 摂あさくら せつ

子どもはつらいよ

なぜ不良になるのか

人間、だれでも、子どものうちは、おとなからめんどろをみてもらう権利をもっている。これはあたりまえのこと、親や学校の先生は、子どもたちを公平にかわいがり、世話をやき、一人前になるまで育てて、教育する義務を負っているわけだ。

ところが、じっさいには、おとなのなかにも、かつてな人間がいるし、バカな人間もいる。子どものめんどろをみなければならぬ義務を負っているのに、みないおとながいる。何人かの子どもや、生徒のめんどろをみるときは、公平にやらなければならないはずなのに、えこひいきする親や先生もいる。そういうことは、あつてはならないことなのだけれども、じっさいには、ときどきあるのだから、そんなとき、どうしたらいいかということは、子どものがわでも考えておいたらいと思う。

もっとも、だからといって、たいていの親や先生たちが、子どもや生徒のめんどろをみ



ることをサボッたり、えこひいきしたりするというわけではない。そういうおとなは数は少ない。しかし、数が少ないだけに、じっさいに、そういうおとなを親や先生に持つて差別された子どもは、世の中の子どもたちがみんなしあわせなのに、自分だけがひどいめに会っている、というふうに思っ、極端にひがむ。

おとなになつてからひろく世間を見渡してみると、かつてなおとなとか、バカなおとなというのは、ずいぶんいることがわかつて、自分を差別したおとなが、特別に悪いというわけでもない、とわかつてくるが、なにしろ子どもころは、そんなにたくさんのおとなを知っているわけではないから、自分に、つらい思いをさせたおとなを、特別に悪い人間だと思つて、苦しむのである。

アメリカの精神医学者に、ウィリアム・ヒーリーという人がいた。この人が四十年ばかり前に書いた『少年非行』という本は、なぜ子どもが不良になるのかということ、科学的に研究したものとして有名なのだが、ヒーリーは、この研究で、とくに、片方だけが非行化してしまつている双生児（そうせいじ）の兄弟を何組も選んで、おなじ環境（かんきやう）で、おなじような性質をもつて育ちながら、なぜ片方は非行化し、なぜ片方は非行化しないか、という理由を調べてみた。

その結果、非行化した片方は、たいてい、幼いころに親から差別されて、兄弟のもう一方だけがかわいがられて自分がかわいがられないという、経験をしていることがわかったのだった。双生児の兄弟を育てていて、片方だけかわいがって、もう一方をかわいがらない親なんているかしら、と思うかもしれないが、世の中には、そんな親もいるのである。

そういう経験をする、子どもは、非常に不安な気分をもったまま大きくなって、ほかの少年ならがまんできる程度のことにも、がまんできないような性質になりやすいのである。ふつうの子どもなら、なにかしゃくにさわるものがあっても、そのときちよつとがまんしていれば、やがて忘れてしまう。ところが、そういう不安な気分をもっている者は、がまんすることができない。そこで、つい、カッとなって、あばれたりして、不良と呼ばれることになってしまう。

子どもをおびえさせるおとなたち

うんと小さいとき、親から愛情の差別を受ける、というようなことは、子どもにとっては、防ぎようがない。差別というわけではなくても、親たちがひどく貧乏で、つい、子どもを、ひどいめにあわせるというようなことも、子どものがわからは、防ぎようがない。



あるいは、貧乏^{びんぼう}ではなくても、両親の夫婦仲が悪くて、いつも子どもをまきぞえにして、大げんかばかりやっているという場合もある。そして、そういうことがしばしば、子どもの不安感のもとになる。そういうおとなたちの困^{こま}った態度は、子どもには防ぎようがないのである。

じつを言えば、私なども子どものころ、母と義理の姉との仲がうまくゆかず、しょっちゅう家の中ではげしい言い争いがあった、いつも小さい兄と二人でおびえていたものである。そのころは、子どものうちからこんなにつらい思いをするなんて、自分はなんという不幸な人間だろう、と心から悲しく思い、世の中に、こんな不幸な子どもはめったにいないにちがいない、と思っていたものである。

ところが、おとなになってから世間を見わたしてみると、こういう状態におかれている子どもなどは、けっして少なくないのだった。いま、私の職業は映画批評家だが、私の友人の批評家のなかには、子どものころ、兄弟のうちで自分一人だけ別な部屋で粗末^{そまつ}な食事をさせられて育って、くやしくってよく泣いていた、という人もいるし、アメリカ人の友人の批評家で、やはり子どものころ両親の夫婦仲が悪くて、いつもけんかばかりしている、こわくていつも泣いてばかりいた、という人もいる。



SETSU



私も、この友人たちも、どうやら、家庭の生活があんまりつらいので、そのかわりに、幸福な夢をもとめて、映画館へ入りびたるようになり、それがとうとう職業になってしまった、というわけである。

もつとも、ウィリアム・ヒーリーは、そんなふうに、子どものころ不幸な家庭でおびえながら育った人間が、かならず不良化すると言っているわけではない。そういう親たちとでも、どこかで深い愛情で結ばれていればいいのだ、と言っている。また、親はそんなふうでも、それに代わる、兄弟とか、近所の親切なおじさん、といったような人たちと強い愛情で結ばれていればいい、とも言っている。

そう言われると、私なども、いつもおびえてはいたけれども、母や、小さい姉、小さい兄などとは、強い愛情で結ばれていたことはまちがいない。子どものころ自分で不幸だと思っていたほどには、私は不幸ではなかったらしいのだ。そして、おとなになってから考えてみると、子どものころに私をおびえさせたおとなたちも、それぞれ、不幸だったのだな、と同情する気持ちにもなってくるのである。

そんなにつらい思いをしたくせに、おとなになってからは、私は、私の育った家になつかしく思い出す。たまたま、母と兄^{あに}嫁の仲がしっくりゆかなかっただけで、あとはふつう

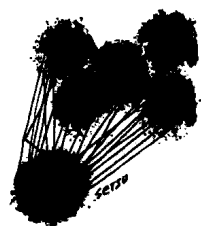
の家庭だったし、べつに、悪い人間はいなかったのである。そして、私という人間は、そこで大きくなったのである。なつかしく思わないわけにはゆかないではないか。

ただ、私が子どものころに出会ったたくさんのおとなたちのなかで、いまでも、思い出すと不愉快な気持になる人物が一人だけいる。それは、私が小学校を卒業するときに受験した、中学の校長である。

許せないただ一人のおとな

それは、一九四三年のことだった。当時はまだ、いまのように中学が義務教育ではなかったから、小学校を卒業すると、中学へ行きたい者は試験を受けなければならなかった。私はある中学を受験したのだが、最初の日、試験場に行くと、受験生はみんな番号を書いた赤い札よだを渡されて、それを首からつるすように言われた。そして講堂に整列させられていると、校長がやってきて壇だんの上に上がり、あいさつもなにもしないで、いきなりそこで和歌を二首、朗読ろうどくした。

明治天皇の御製ぎょせいだった。私は、この歌の意味があとで試験に出るのだな、と思って、いっしょうけんめい、それを暗記あんきしようとした。そして、ふとあたりを見ると、他の受験生



がみんな頭を下げて聞いているのに気づいた。

そのころは、天皇ということばや、天皇に関係のある話が出たときには、軍隊や学校では、居合わせた人間はみんな起立して、気を付けの姿勢をするとか、勅語や御製の朗読は頭を下げて聞く、ということが、やかましく強制されていたのである。

私もそれは知っていたのだが、入学試験で緊張して、つい、うっかりしていたというわけである。だから、途中で気づいて、あわてて頭を下げたのだった。

そのときの試験は、私には良い成績がとれたと思った。ところが、発表を見にゆくと、私は落第していたのだった。私の小学校の受け持ちの先生は、小学校の成績は良かったのだから、不思議だ不思議だ、と言っていた。とにかく私は、小学校の高等科に行って、翌年また、おなじ中学を受験するつもりでいた。

翌年の受験が迫って、受験生のための補習授業がはじまった。そのとき、受験の裏表をよく知っている一人の先生が、受験生をみんな集めて、それぞれの志望校の受験の注意を与えた。この先生の話によれば、私がまた受験しようとしている中学の校長は、国粹主義者として有名な人で、その思想から、ちよつと変わった試験のやり方をしている、というのである。